

1957 年の石橋湛山の健康問題における医師団の役割と貢献

The Medical Team's Role and Contribution for Ishibashi Tanzan's Health Problem in 1957

鈴木裕輔（名城大学 外国語学部）

SUZUMURA, Yusuke, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

要約

1957 年 2 月 23 日、内閣総理大臣の石橋湛山は自らの健康問題を理由に退陣を表明した。政権の維持に固執せず、国政の停滞を避けた石橋の判断は、現在に至るまで高く評価されている。その一方で、石橋の健康状態を診断した医師団については、顔触れが明らかになっているものの各人の来歴や判断の妥当性などについてこれまでの研究では明らかにされてこなかった。そこで、本研究では、医師団に参加した村山富治、佐々廉平、沖中重雄、橋本寛敏の 4 名について、それぞれの事績を確認するとともに、診断の内容が適切であったかを検討する。

It was the 23rd of February 1957 when Prime Minister Tanzan Ishibashi announced to leave the position by the reason of his health problem. Ishibashi's attitude and decision has been evaluated highly, since he prioritized avoiding political stagnation over maintaining the cabinet. On the other hand there is no enough analysis and examination for the role and contribution of the team of doctors for Ishibashi. In this paper I examined personal history of four medical doctors who consisted of the team, Tomiharu Murayama, Rempei Sassa, Shigeo Okinaka, and Hirotoshi Hashimoto, and validity of their medical decision.

1. はじめに

1957（昭和 32）年 2 月 23 日、内閣総理大臣の石橋湛山が自らの健康問題を理由として辞意を表明した。

官房長官の石田博英が石橋の書簡（読売新聞, 1957, 2 月 23 日 a, p. 1）を発表すると、報道各社の反応はおおむね好意的であった（読売新聞, 1957, 2 月 23 日 b, p. 1; 毎日新聞, 1957, 2 月 23 日, p. 1; 朝日新聞, 1957, 2 月 23 日, p. 1）。

石橋が辞意を表明するに至った発端は、首相就任の約 1 か月後である 1957 年 1 月 25 日に風邪をひいて寝込んだことであるとされ、石橋、石田、自民党幹事長の三木武夫の三者は、医師団が精密検査を行った後に下す最終的な診断を踏まえ、政権の続投か総辞職かを決めることで合意した（石田, 1965, p. 68）。そして、2 月 22 日に医師団は精密検査の結果と同日の午前中から半日をかけて検査した心電図や X 線、検尿の成績について数値の判定と解釈を行い、「2 か月の静養」という診断を下すことで意見が一致した（橋本, 1957, p. 231）。その結果、石橋は退陣を決意したのであった。

一連の出来事は、現在でも政治学の教科書に取り上げられている。また、石橋の評伝や概説書においても、必ずと言ってよいほど紹介される逸話である。

その一方で、石橋の診断に従事した医師団の顔触れや来歴については、これまで詳細に検

討されることはなかった。そこで、本論では石橋湛山の診察を行った医師団の4名がどのような人物たちであったかを確認するとともに、医師団の果たし役割及び診断の妥当性を検討する。

2. 医師団の顔触れ

医師団の顔触れは、石橋の主治医であった村山富治と佐々廉平に沖中重雄と橋本寛敏を加えた4人である。

ここで、医師団の4人の来歴を確認しよう。

2.1. 橋本富治

医師団の筆頭である村山富治は、原田熊雄の家庭医を1922（大正11）年から1946（昭和21）年まで務め、当時は日本橋本石町で村山医院を開業していた。

日本銀行での勤務を経て1924（大正13）年に首相の加藤高明の秘書官に就任した原田は、1926（大正15）年には「最後の元老」西園寺公望の私設秘書となる。これ以降、西園寺の側近として政界の情報の収集に努めるとともに西園寺の意を体して各回の要人との連絡係の役目を果たした。

原田は西園寺の言動を中心に政界最上層部の様子について口述し、近衛泰子に筆記させたいわゆる「原田日記」を残す。近衛泰子の夫は、近衛文麿の弟で指揮者・作曲家の近衛秀麿である！

「原田日記」が『西園寺公と政局』と題して公表されるのは、1950（昭和25）年であった。しかし、1948（昭和23）年には「原田日記」がやはり1966（昭和41）年に出版されることになる木戸幸一の「木戸日記」とともに、極東国際軍事裁判に証拠として提出されている。ただし、「原田日記」は記述の信憑性や口述した原田の精神状態が問題とされたため（読売新聞, 1948, p. 2）、原田の家庭医であった村山が検察側証人として出廷している（国立国会図書館デジタルコレクション, 1948年）。

2.2. 佐々廉平

佐々廉平は岡山県の山間部の温泉町である湯郷から身を起こして18歳で医術開業試験に合格するとともに、第一高等学校から東京帝国大学に進学し、内科教室に入って内科医の道を歩んだ。佐々が指導を受けたのは、1901（明治34）年に東京帝国大学医科大学学長となり、日本の医学界の指導者として医学教育制度の拡充に尽力した青山胤通であった。

約2年半にわたりミュンヘンとウィーンで当時の最先端の治療医学を学んだ佐々は1914（大正3）年に杏雲堂病院が新設した心腎新陳代謝科の科長となり、1938（昭和13）年には院長に就任する。佐々にとって、村山は杏雲堂病院心腎新陳代謝科の部下であった。

この間、1922（大正11）年には南江堂書店から日本語で書かれた初めての腎臓病専門書である『腎臓疾患之病理及療法』を出版し、1935（昭和10）年に共著書『腎臓病と糖尿病の新治療法』（実業之日本社）を上梓するなど、戦前の日本の腎臓学の進歩に最も貢献した臨床医であった（長澤, 2007, p. 4）。

1939（昭和14）年、佐々の長女松子が薬理学者の橋本虎六と結婚した。橋本は東京大学医学部助教授を経て東北大学医学部教授となり多くの循環薬理学者を育てている。橋本の

兄は厚生大臣や文部大臣を歴任した橋本龍伍で、甥は後に首相となる橋本龍太郎であった。

橋本も岡山県から東京に出て薬学を修めたから、佐々とは東京における岡山人脈という繋がりがあった。

2.3. 沖中重雄

沖中重雄は 1928（昭和 3）年に東京帝国大学医学部で内科学と自律神経の研究を行い、1946（昭和 21）年に 44 歳という異例の若さで医学部教授に就任している。この頃から神経内科の独立を進め、現在の日本神経学会の設立に貢献した（高橋, 2009, p. 728）。

東京大学を定年退官した後は虎の門病院院長、沖中記念成人病研究所理事長、宮内庁内定医事参与などを歴任し、1970（昭和 45）年に文化勲章、1975（昭和 50）年に勲一等瑞宝章を受章した。また、第 1 回アジア大洋州神経学会会長（1962 [昭和 37] 年）、第 12 回世界神経学会名誉会長（1981 [昭和 56] 年）など多くの学会を主催し、戦後の日本の医学界の発展に寄与している。

2.4. 橋本寛敏

橋本寛敏は東京帝国大学医学部を卒業した後、1921（大正 10）年から 2 年間北海道の市立札幌病院で医長を務め、1923（大正 12）年にロックフェラー財団研究員として米国ミネソタ州の総合病院メイヨー・クリニックとジョンズ・ホプキンス大学に留学する（日本病院会 50 年史編集委員会, 2001, p. 19）。

研究者としての橋本は日本で最初の不整脈に関する専門書『不整脈』（金原商店、1937 年）を出版しており、臨床医としては 1925（大正 14）年から聖路加国際病院に勤務し、1941（昭和 16）年に病院長となっている。また、橋本は学会活動にも積極的で、日本病院学会の設立（1951 [昭和 26] 年）に尽力したほか（日本病院会 50 年史編集委員会, 2001, pp. 10-11）、日本内科学会理事として内科医専門医制度の確立も進めるなど（木野, 2007, p. 364）、戦後の医学界の発展に取り組んだ。日本内科学会理事時代の理事長は、沖中重雄であった。

3. 医師団の選考の経緯

以上のような顔触れについて、本節では当初の医師団であった村山と佐々に加え、新たに沖中と橋本が参加した経緯を検討する。

まず、石橋の主治医であった村山²がかつての上司であった佐々を加え、佐々が橋本を招聘したことは、橋本自身の回想に記されている。すなわち、医師団への参加は村山が電話で依頼したものであり、これまで面識のない村山から電話がかかってきた点については、村山が佐々と相談した結果であろうというのが、橋本の推測である（橋本, 1957, pp. 228-229）。

また、橋本の下で聖路加国際病院に勤務し、後に石橋湛山の主治医となった日野原重明は、橋本が医師団に参加したのは自民党側からの依頼であったと指摘する。すなわち、村山富治が往診し、石橋が自宅療養を行ったものの症状が一向に改善しなかったため、自民党の幹部が心配し、特に沖中重雄と橋本に立ち合い診療を依頼したというのである（日野原, 1983, p. 123）。このとき、二人に参加を要請したのは、三木と石田であった（石田, 1957, p. 251）。

こうした情報を総合すれば、三木と石田が医師団の増員を要望し、佐々から沖中と橋本への打診が行われたと考えられる。

4. 医師団の診断は妥当であったか

集められた顔触れからも、医師団には各分野の第一人者が揃っていたことがわかる。それだけに、例えば精密検査の結果「1 か月で回復」と診断しながら1 か月が経っても石橋が公務に復帰できない場合、政局の混乱や医師団の一人ひとりの名誉が損なわれるだけでなく、日本の医学界の水準も問題とならざるを得ない。そのため、医師団の診断に間違いは許されなかった。

このような状況を受けて、新たに医師団に加わった沖中は、精密検査が行われる2月22日の朝、石橋の主治医である佐々の自宅に向かった。医師団に加わる際に聞いた石橋の症状の中に腑に落ちない内容があったため、沖中は佐々にこれまでの経過と所見を確認し、あわせてその胸の内を尋ねようと思ったためであった（日本経済新聞社, 1971, pp. 63-64）。

そして、石橋の早期の回復による政局の收拾を目指す政治家たちの意向と医師としての責務の間で苦悩する佐々に対し、沖中は「先生、まことに申しわけないが、私が首相を拝見した結果、仕事がやれそうにないと判断したら、先生のご意向にそむいても、そう言うつもりです」と了解を求めている（日本経済新聞社, 1971, p. 64）。

石橋の精密検査は午後6時から始まった。場所は2階の寝室である（橋本, 1957, p. 230）。医師団が診断を終えたのは午後6時30分で、午後9時30分の記者会見までの間、4人の意思と石橋の側近たちとの間で、どのような発表とするか、内容が検討された。

合議に際しては、精密検査の結果が基礎的な資料とされた。そして、午前中から半日をかけて検査した心電図やX線、検尿の成績について数値の判定と解釈が行われ、最終的に内科医としての知見を総合して診断が下された。判定には2時間がかかった（橋本, 1957, p. 231）

その結果、医師団は「2か月の静養」という診断を下すことで意見が一致した。

石橋、三木、石田の取り決めに従えば、静養期間が2か月ということは、石橋の首相退陣を意味する。

沖中は「なお見込みが50%でもあれば、あるいは妥協していたかもしれない。しかし、この場合妥協の余地はなかった」（日本経済新聞社, 1971, p. 65）と、診断の内容に関しては政治的な配慮などはせず、医学的な観点に即したことを強調している。

石橋は医師団の精密検査の結果に従い、辞任を決意した。そして、石橋の決断を、当時の人々は称賛した。何故なら、「いままで総理大臣というポストはだれもそうやすやすと投げ出したものがなかった」（岩淵, 1957, p. 1）からである。

一方、「2か月の静養」という医学的判断の妥当性については、医師団が診察後の判定会議に時間を要したことから、報道関係者が政治的工作、あるいは政権や自民党の申し入れによって医師団の判定が妨げられ、故意に診断が遅れたという疑問が持たれた。しかし、討議が長引いたのは何らかの政治的な交錯によるのではなく、一国の首相の病状を扱うだけに慎重にならざるを得ないためだった。実際、橋本は沖中と事前に相談し、「誠実にそして正しい方法でやろう」、「診にゆくからには、並び大名ではいかん、合議の席に顔を連ねるといっただけではいけない」と意見の一致を見ている（橋本, 1957, p. 230）。「自己の信念に忠実になろうという初めの決心」（橋本, 1957, p. 232）の橋本の姿勢を考えれば、医師団の判定に際して政治的な圧力はなく、当時の医学の水準に照らして妥当な内容であったと推察される。

5. おわりに

今回、本研究では健康問題によって首相を退任した石橋湛山について、診察を担当した医師団4名の来歴及び診断の内容ならびに妥当性について検討した。

その結果、医師団に参加した村山富治、佐々廉平、沖中重雄、橋本寛敏の4名はいずれも当時の日本の医学界を代表する医師であり、診断の内容には政治的な圧力はなく、純粋に医学的な見地から所見が下されたことが確認された。

今後、機会を改めて医師団と政権や自民党幹部、あるいは報道陣との関係の詳細を検討し、石橋湛山の退陣における医師団が果たした役割の詳細を明らかにしたい。

注

¹ 近衛文麿の夫人千代子は泰子の姉であり、二人とも宇土藩主細川行真の次男で毛利式速記の創始者として知られる毛利高範の実の娘であるから、近衛兄弟は毛利姉妹をそれぞれ妻に迎えたことになる。

² 石橋湛山が1945（昭和20）年から1957（昭和32）年までに書いた日記をまとめた『石橋湛山日記』（上下巻、みすず書房、2001年）には、石橋が定期的に村山医院に通院し、村山富治の診断を受けている様子が記録されている。

引用文献

- 朝日新聞（1957, 2月23日）. 「九週間の短命内閣」, 『朝日新聞』, 1.
- 橋本寛敏（1957）. 「医師団の一人として」 湛山会(編)『名峰湛山』, 東京: 一二三書房.
- 日野原重明（1983）. 『死をどう生きたか』, 東京: 中央公論社.
- 石田博英（1957）. 「名峰湛山」への回想 湛山会(編)『名峰湛山』, 東京: 一二三書房.
- 石田博英（1965）. 『私の自画像』 東京: 実業之日本社.
- 岩淵辰雄（1957, 2月24日）. 「筋を通した石橋」『毎日新聞』, 1.
- 木野昌也（2007）. 「社団法人日本内科学会専門医部会成立の報告」『日本内科学会雑誌』, 96(2), 364-367.
- 国立国会図書館デジタルコレクション（1948）. 「宣誓供述書（法廷証第3749号）」 Retrieved from <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10282019>.
- 毎日新聞（1957, 2月23日）. 「石橋内閣の総辞職」『毎日新聞』, 1.
- 長澤俊彦（2007）. 「日本の腎臓学の歩み」『日本腎臓学会会誌』, 49(1), 4-7.
- 日本病院会 50 年史編集委員会（2001）. 『日本病院会 50 年史 1951-2000』, 東京: 日本病院会.
- 日本経済新聞社（1971）. 『私の履歴書』第44集, 東京: 日本経済新聞社.
- 高橋昭（2009）. 「日本神経学会—誕生と発展—」『臨床神経学』, 49(11), 724-730.
- 読売新聞（1948, 1月16日）. 「原田日記 審判台へ」『読売新聞』, 2.
- 読売新聞（1957, 2月23日 a）. 「首相書簡」『読売新聞』, 1.
- 読売新聞（1957, 2月23日 b）. 「当を得た石橋首相の進退」『読売新聞』, 1.